校友会報

第11号

昭和42年7月1日

日本大学工学部校友会

福島県郡山市田村町徳定

電話郡山②1563番

発行人　半沢　忠

編集人　武藤貞泰

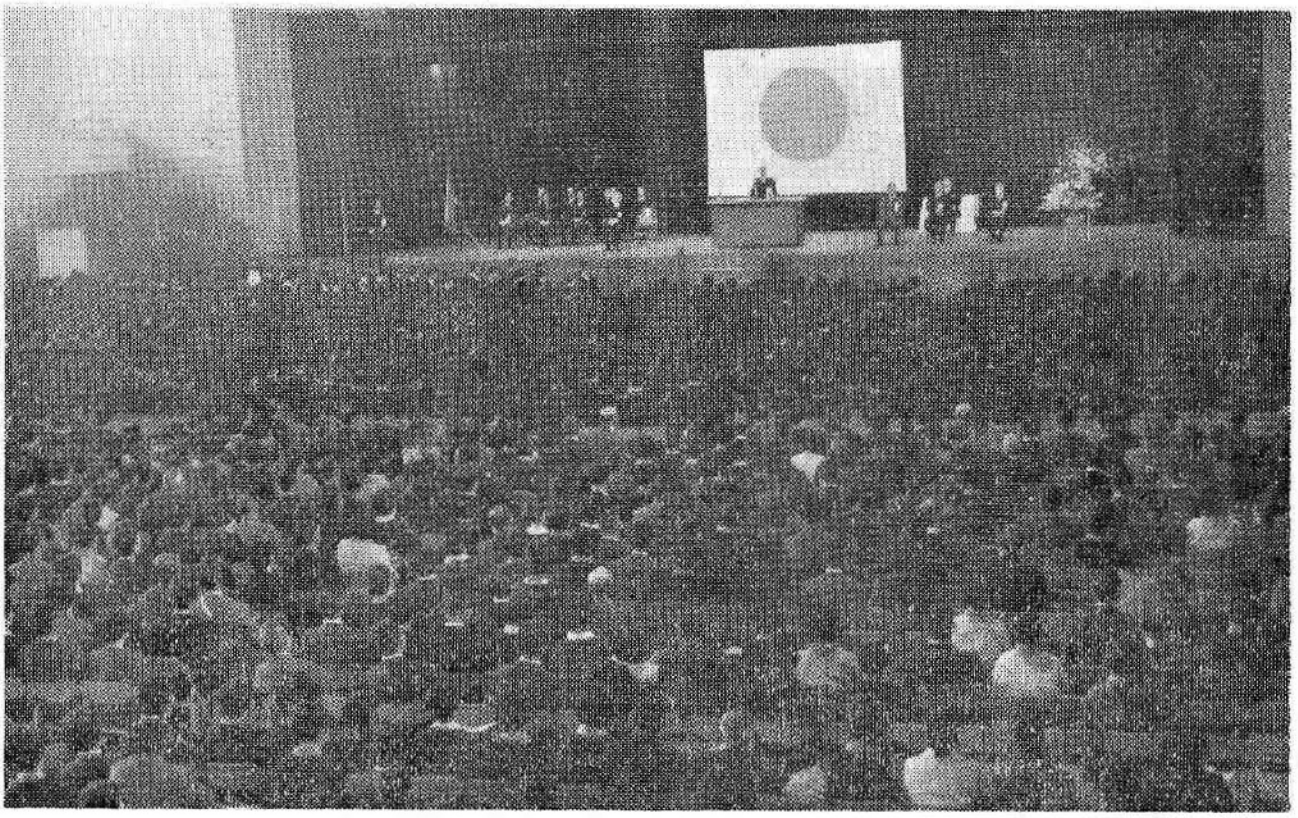
昭和42年度 日本大学工学部入学式

日本大学工学部昭和42年度の入学式は、4月14日午後1時から本学部大講堂において、永田日本大学総長始め多数の来賓、父兄、教職員参列のもとに行われ、女子学生5名を含む1108名という、本学部にとつて例のない多数の若人を迎えたわけである。

横地工学部長から我が工学部学生としての心構えについて、式辞があり、続いて永田総長からは建学の精神を理解し、つねに忍耐、努力、克己心によつて理想追求に奮励されよとの告辞があつた。これに対して新入生を代表し、土木工学科斎藤誠君から入学後の堅い決意を述べ、期待に添うよう努力する旨の宣誓があつたが、遠方から付添つて来た700人に近い父兄の胸に深く頷くものがあつたように感じられた。次に祝辞、祝電の披露と、特別の善行表彰があり、午後2時過ぎ式は無事に終了した。

入学生の内訳は次の通りである。

土木	建築	機械	電気	工化	合計
252	297	236	201	122	1108



（写真は日本大学工学部入学式の状況）

校友諸兄姉へ

会長　根本年雄

校友の諸兄姉には、全国各地において、御健勝で御活躍のこと、心からお喜び申上げます。

本年度の総会において、再び、会長に選任されましたが、顧みますと、昨年は多事多難な年度でございましたが、役員、校友諸兄姉のご指導、ご鞭撻により、会の事業を遂行させて戴きましたことを厚く御礼申上げます。本年も微力ではございますが、役員及び諸兄姉のご指導のもと、よりよい校友会の育成に努力いたしたいと存じ、この紙上で本年度の運動方針、及び事業計画を簡単にのべ、校友諸兄姉のご理解を得たいと思います。

会則第3条の会の目的を基盤として、運営することは、言をまたないところでありますが、近年、日本大学の母校愛にもえ、校友会の団結を図る意味において、全国各所で全日本大学校友会支部が結成される、機運に満ちていることは、誠に喜ばしいことであります。本会でも昨年、工科校友会加入についての専門委員会を設置して、本会が工科校友会へ加入後の組織について、数回にわたり協議いたしましたが、本会は自主独立の立場から、本会と工科校友会との友好、団結を図る上部機関の設置を提案し、現在この機関設置について、検討中でありますが、ぜひ実現させ、工科校友会との親睦を更に深めたいと考えております。また近年在京校友が年々才々増加している今日、東京支部を結成されてはどうか、との、一部在京校友の希望もありますが、本年は在京校友からも役員を推せんして、在京校友の声を役員会に反映させて、支部づくりの基盤を固めたいと思つております。

又、事業については、昨年12月学校、学生自治会の要望により、校友会と学校、学生自治会からなる、下宿対策委員会が発足され、従来の下宿斡旋方法の改善を図りましたが、本年度は更に下宿対策について、校友会の下宿斡旋の事務内容を検討し、不備な点を改善してゆきたいと思つております。

あかしや奨学生については、昭和35年以来、毎年3名を採用しておりましたが、本年度の総会において、奨学生の増員について提案、可決され、5名に決定されました。奨学生の採用決定基準は、学業、人物、ともに優秀かつ、健康であつて、学資の支弁が経済的理由により、困難であるとともに、校友会と母校の発展に協力する者でありまして、6月3日（土）、校友会館において、42年度の奨学生5名の採用を決定しました。

校友と学生との懇談会については、各職域で大いに御活躍されている校友各科2名のご協力により、10月中に、開催予定で、学校への協力、援助を御願いし了承も得ておりますので、後輩のために盛大に開催いたしたいと思います。

会報発行、卒業生の名簿作成、学術講演発表会、卒業祝賀会、学生クラブ援助等については、例年どおり行いますが、その他、会の目的達成に必要な事業については、その都度協議決定し、母校の発展と校友会の発展のために粉骨砕身努力致す覚悟でございます。どうかよろしく、校友諸兄姉のご協力、ご指導をお願い申上げます。

最後に、この会報を通じて校友各位の親睦と友好が高まり、校友会が益々発展進歩することを願い、校友諸兄姉のご発展と、ご健康をお祈りいたします。

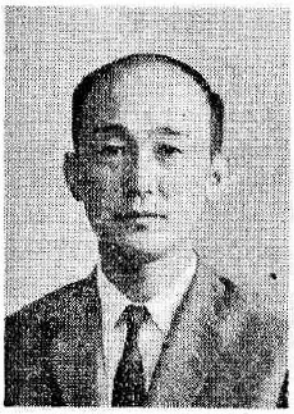
（国鉄郡山工場勤務）

卒業生の都道府県別勤務状況（42.2.1現在）

順位	都道府県	人数	比率	順位	都道府県	人数	比率	順位	都道府県	人数	比率
1	東京	1346	31.05	17	兵庫	56	1.29	33	大分	17	0.39
2	福島	514	11.86	17	群馬	56	1.29	34	鹿児島	16	0.36
3	神奈川	356	8.21	19	長野	42	0.96	35	沖縄	14	0.32
4	埼玉	181	4.18	20	富山	40	0.92	36	京都	13	0.30
5	大阪	176	4.06	21	青森	34	0.78	36	宮崎	13	0.30
6	愛知	162	3.74	22	秋田	31	0.71	36	香川	13	0.30
7	宮城	149	3.44	22	岩手	31	0.71	39	熊本	11	0.25
8	北海道	129	2.98	22	岡山	31	0.71	40	高知	10	0.23
9	静岡	119	2.75	25	山口	29	0.66	41	和歌山	8	0.18
10	新潟	96	2.21	26	三重	26	0.60	42	福井	6	0.13
11	福岡	88	2.03	27	長崎	22	0.51	43	奈良	5	0.11
11	広島	88	2.03	28	山梨	21	0.48	44	滋賀	4	0.09
13	千葉	87	2.01	29	石川	19	0.43	44	韓国	4	0.09
14	茨城	80	1.85	29	岐阜	19	0.43	46	島根	3	0.06
15	山形	67	1.55	31	佐賀	18	0.41	46	徳島	3	0.06
16	栃木	62	1.43	31	愛媛	18	0.41	48	鳥取	2	0.04

日本大学 その隆盛こそ 時の流れ

日本大学教授　片　山　将　道



題は、「慶応義塾」その退潮も、時の流れか（カツパビジネス）三鬼陽之助著をもじつたものである。あまりよい趣味ではなく申訳ありませんが慶応出身者の実業界における地位の退潮と、日本大学の戦後の驚異的な膨張を考えあわせて感ずるところあり、あえてこのような題にしました。

また、この本の 113頁に、横井英樹が、彼の会社乗つ取り哲学「二代目社長こそ好目標」に則つて、東洋精糖の乗つ取りを計画したところが、社長の秋山利郎氏が二代目は二代目でも「慶応二代目」でなく、「いささか野蛮だが、それだけなにくそ精神の旺盛な日大二代目」であることを、計画が失敗して、あらためて認識させられ、「狙うなら、やつぱり慶応二代目だ」とつぶやかせたという段がある。この「なにくそ精神」についても感ずるところあり、上記のような題にした次第です。

慶応が退潮を示した条件の中に、学閥を作りすぎた点があげられています。わが日本大学においては、学内学外に閥は存在しないと思います。私達が教えをうけた先生も、東大、東北大、早大、教育大、京大ありで、いずれも立派な先生方ばかりでした。工学部の先生方も各方面から集つておられます。このような教育をうけた学生が、社会に巣立つたとき、その職場で閥を作るはずはない。閥は、それがどのような種類のものであれ、島国根性、狭量のあらわれであるが故に世間から嫌われます。日本大学および卒業生が、このような点を認識して、広い視野をもつて事に処したならば、世間は喜んでこれを迎えるはずである。ここに日本大学の隆盛の一つの大きな原因があるのではないかと思う。

私は昨年４月に本校に赴任して参りましたが、各科各研究室間に和気あいあいたる気風を感じ大変嬉しく感じました。今後も、実力ある先生は、どのような分野からでも工学部に参加頂いて、本校の隆盛に努められるこの傾向を助長してほしいと思つております。本校出身者は、つまらない閥のようなものには期待をもたず、独力で運命を切開いて行く覇気をもつて頂きたいと思います。

腕一本で、広い世間を堂々と生きて行くためには、能力、根性、体力が必要であることは今更いうまでもない。この３者のうち、どれが一番大切ですか？。これはＮＨＫの「サラリーマン」という番組で出された質問で、答は体力が一番多かつた。しかし、重ねての質問で「能力が根本で、これを活かすのは根性で、根性を効果的に出すためには体力がいる。」と付言されています。この逆もいえましよう。

三鬼陽之助の書いているように、日本大学の卒業生の中の成功者は、ほとんどこの根性「何くそ精神」で世に出た人達だと思います。学閥、財閥、閨閥などの、やはり「何くそ精神」をもつた人達が、集団となつている閥と、あるときは戦い、またあるときは利用しながら勝ちぬいた先輩諸兄は、全てこの「何くそ精神」を人並以上にもつて戦いぬき、しかも堂々と勝つた一匹狼の勝利者ですから、世の人々が拍手をもつて迎えないはずはない。日本大学工学部の校友諸兄よ、スケールオーバーの「何くそ精神」で独立独歩しようではないか。ここにも日本大学隆盛の原因があると思う。

「福沢先生は、草葉の陰で泣いている」そうであるが、山田顕義先生は目を白黒させておられるであろう。

（筆者は、工業化学科教授、工学部学監）

沖縄だより　桃原　隆（建築6回卒）

校友会報９号を手にし、懐しき学生時代が思い出され筆を取つた所です。校友会の皆様、そして役員の皆様、大変ごくろう様です。

小生も卒業以来８年程の月日がたつたようです。我々も学生時代を追憶して毎年小宴をもうけ、お互に励まし合つています。ここ遠い沖縄では総会などに出席出来ないので残念でなりません。せめてその当日の写真等、又校内新聞なりを見たいと、ぜいたくに思つています。

ところで沖縄は、激化したベトナムの戦争に依り、その影響をうけ、町は米兵でごつたがえしています。こちらはまだ戦後ではなくて、戦時中です。一日も早く日本復帰が実現するよう、全力を挙げ島ぐるみで斗争しても、なかなからちがあかない有様です。どうぞ皆様も協力して下さい。お願いします。

次に私の職場でのニュースをお伝えしておきます。私達の先輩で土木第４回卒業の久高将栄氏がめでたく建設局工事部土木設計課長に昇任しました。我々後輩も心強く毎日の職場で励んでおります。

（琉球政府建設局土木建築部建築課勤務）

流圧利用による圧密工法

石　井　一　栄

1.　近年の土地造成のめざましい発展に伴い海岸地の埋立及び湿地帯の埋立が多くなりそれに伴い諸工法も開発され工学的にもめざましいものが多くなつて来た。地盤の改良方法についても各種の工法が採用されているが私の考えた範囲は特に限られたる条件範囲の下で実施されるものであるが次にその工法の内容適用範囲について順を追つて述べるものとする。

2.　本工法の適用範囲

製鉄石油コンビナート地帯に於ける拡大な地域にて早期に低廉に一期に改良する場合特に有利である特に粘性地盤に好適である。在来迄はこれらの改良についてはサンドパイル、ペーパードレーン、ケミコライザーパイパル等に外圧用として盛土強制脱水が併用されて来たその他の工法としては、電気滲透工法バイブロフロテーシヨン、バイブロコンポーザー、コンパクシヨンパイル等があるが特に粘性地盤にて埋立後日浅く又鋭敏比が高い場合静的な外圧の加え方が必要となり、ジエツト式サンドパイルか排水工法の併用が優れた工法として採用されているこれらと類似でしかも経費のかからぬ方法として考えた工法である。

工法の概説

1.　地中に薄い袋状のものを挿入しこれに空圧もしくは油圧、水圧をもつて地中に水平外力を与え垂直圧密より水平圧密を行なうべく土性特有の性質に合う圧力を算定し一定期間の圧力の維持により地盤を改良するものである。

2.　本工法の計画実施

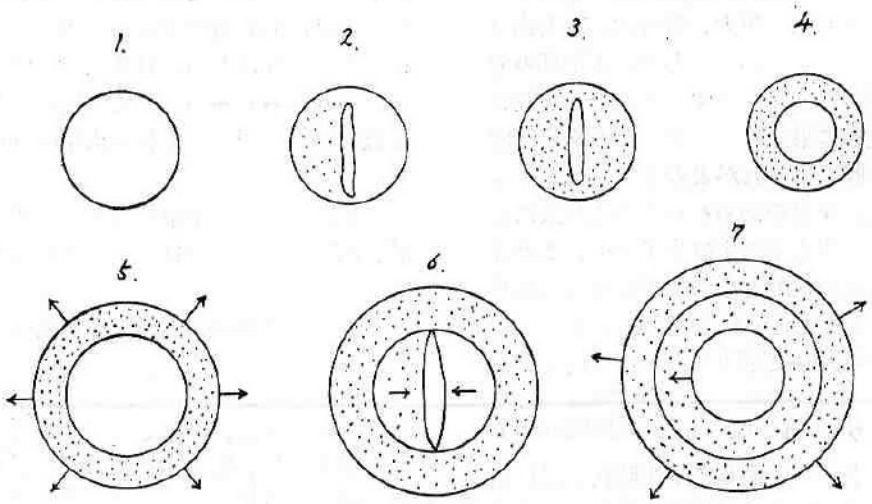
1.　土質試験の結果を基に土性を検討し水平応力の伝播有効範囲を決定し、各々のサークルを重ね合わせ改良対象地盤に適圧の加わる様にする。
2.　改良深さの決定をする。
3.　土性と圧力の大いさの調節をする。
4.　圧力の維持及び段階の時間等の検討をする。

機構設備

1.　コンプレツサー　10kg/cm²　レシーバータンク付
2.　ゲージその他附属品　一式
3.　打設機　5 m～25m　一式
4.　メーンパイプ及支管　1セツト　一式
5.　エアタイト袋

実施工

地中に打設機により、パイルホールを穿ちこれに伸縮自由なるエアタイト袋を挿入し、パイルホールと孔壁の間に砂を填充し、このエアタイト袋に流圧（空圧1例）をかけ孔壁に横圧をかけることをくり返し実施する次に図示する。



(1)　ホール穿ち
(2)　チューブ建込
(3)　砂填充
(4)　空圧をかける
(5)　所定範囲迄横圧する
(6)　空圧除去及び填充物補給
(7)　横圧送入

以上(1)～(7)迄を土性に合う範囲に打設しくり返す。

上記は粘性土地盤に適するので、サンドパイル併用を行なうと尚有効的である。この外地盤改良工法としてCS工法及びS.V.R工法等も実施中であるが又の機会に述べるものとする。

（筆者は土木4回卒、
石井技術士事務所長）

佐原市の下水道

鈴　木　昭　七

千葉県と茨城県の県境を流れている利根川、その下流地帯「景勝日本水郷」の中心都市である当佐原市は、徳川時代の初期より開拓されて、著しい発展を遂げ全国有数の早場米地帯として知られている一方、利根川の水運によつて交通上地の利を得、中間問屋的商業が大いに進み、加えて、原料に適当なものを得られる事によつて醸造業が頗る盛り、千葉県北部、茨城県南部一帯の交通、経済文化の中心都市となり昭和26年市制施行以来、飛躍的発展が期待されて、最近は観光産業都市としても益々発展を期待し得る。此の市に、昭和33年5月私は福島県郡山市より、都市計画事業の任を果たすべく転じて来ました。全年9月水害に直面し、時の坂本市長は高令の老軀にむちうつて自ら陣頭に立ち、被災地の視察に出向かれ私は市長の随行者として、その対策に取りかかつたが、何分来たばかりで、地理的にも暗く又各官庁の連絡も如何にすべきか一時は手のほどこしようもなかつた。結果的には応急的対策に区分し、建設的復旧作業に取りかかる事になつた。其の当時市長も下水道事業計画はあつたが、具体的な案は持たず、此の災害を機に恒久的対策として下水道整備に重点がおかれ、3億の費用を投じて市街地の一部 156ヘクタールを先づ大臣認可を得る。勿論余る程の技術者も居らず、調査から設計、監督まですべて1人の仕事であつた。昭和34年度はじめての補助金はついたが、起債と一般財源とをあわせても其の予算は微々たるものであつた。然し此のような状態でも、とにかく着工する事が先決であると思い僅か6百万の費用で、管渠埋設工事に取りかかつたのである。

其の計画内容の基本的なものを具体的に記すと、

1、下水道築造の必要なる理由として

市街地は、利根川右岸の平坦地にあつて、ほぼ中央を小野川が東西に貫流、利根川に注いでいる。当市街地の排水は、小野川及び各在来の水路に頼つているが、これら河川、水路は、断面勾配が不適当な上、汚物、泥土等が沈澱、停滞し極めて不衛生な状態である。

2．下水排除方式

本市は合流式を採用し、常時自然流下にて排除する。但し将来下水処理場を実施した場合は、各吐口に分水槽を設け、3倍稀釈放流法により、雨天時には、日最大汚水量の3倍までを汚水と見なして、これを下水処理場に導き3倍を超過した場合は直接放流する。

3．汚水量

1人1日当り、最大汚水量 300リットルとする。時間最大汚水量はその 1.5倍、地下水量は、日最大汚水量の20%を見込む。

4．雨水量

雨水量算定には、滞流式合理式を採用する。1時間35粍の降雨を採用、（算定式は省略する）

5．伏越

やむをえず下水管が河川、水路、その他障害物を横断する場合は伏越とする。

着工以来2～3ケ月は市民も下水道に対する関心も薄く、商店街等の苦情も多く、想像以上のものがあつた。これを切り抜けるために、各行政区域毎に、その必要性を説明し、管埋設後の道路復旧はすべて、舗装（アスファルト）とし、又現在の側溝はすべてL型溝とする。その他細い点は種々あつたが、とにかく市民の要望にこたえ、又市民生活に直結した下水道行政であるべく、お互いにこの事業を完成するために日夜心を砕いた。此のような苦しい一期間はあつたが、昭和37年頃から、既設区域の効果が発揮されたので、市民も積極的になり、現在では環境衛生の面から見てもその効果は顕著なもので、降雨時の浸水被害による、伝染病発生等のいまわしい現象も殆んどみられないようになつた。これでこそ、市民生活に直結した下水道行政であり、又市民の要望に答えた下水道行政であると私は痛感するものである。

最近では、予算編成時に於いてもその重点施策としてとりあげられ、最大限度に組み入れられている。そうして将来にむかつて益々その積極的推進を企画して、とどまる事を知らず、私の本領とする所であります。

この事は佐原市の一事例に過ぎないが、全国各都市とも下水道事業には、日夜奮闘されていることとは思いますが、何と云つても現在の我が国では大事業であり、最近では流域下水道の計画実施まで規模を広め、その財源、構想においても、国が率先して国民をひきい、その整備に邁進している現状である。それでも我が国の下水道事業普及率は20%と云われ、又都市の不規則な膨張により、これを世界水準まで上昇させる事を思う時容易な事ではないが、これこそ我々の世代に与えられた任であり、有言不言を問わず、双手をあげて歓迎するところであり、今後の下水道整備の飛躍的促進に期待するものである。

（筆者は土木4回卒、千葉県佐原市役所建設課勤務）

昭和42年度
校友会総会を開く

昭和42年度日本大学工学部校友会総会は、4月23日午後1時から、満開の桜に包まれた郡山商工会館において、会員多数の出席を得て開かれた。

開会につづいて根本会長から次のような挨拶があつた。

◎ 多事であつた前年度は役員各位並びに諸兄の御協力によつて何とか乗り切つてきた。

◎ 校友が年々増加するにつれて各地に、団結した動きがあり、中でも昨年大阪校友会（オール日大）が我々同胞をまじい結成したことは喜ばしいこと。

◎ 本会としては工科校友会加入の問題で、専門委員会を設け、調査を進め、検討を加えて研究していただいたが、このことは今後の運営と活動とに大きな契機を得たものであつて、委員各位に心から感謝の意を表したい。

◎ 今日の総会に提案した議案については、充分に審議されるよう希望する。

ついで議長に植木浩氏（電気14回）を万場一致で選出して議事に入る。

(1) 昭和41年度会務について、柳沼事務局長から特筆することの第1点は、専門委員会の設置であり、第2点は下宿対策委員会の発足であり、第3点は学生クラブ振興会に対しての援助である。以上3点を中心に報告された。

(2) 昭和41年度会計について、宍戸経理部長から別項の通り説明があり、異議なく承認、

(3) 昭和42年度事業計画と予算の件は、会長、経理部長が中心となつて説明が行われ、審議の結果、原案通り議決された。

(4) 役員改選は選考委員会によつて協議した結果、根本氏が会長に再任され、その他の役員も別項の通り決定して、新陣容がととのつた。

(5) 最後に後藤尚氏から、専門委員会の委員を代表して、工科校友会との加入問題について、調査し話し合つた経過の報告と見解の開陳があつた。

かくして、終始熱心に建設的な論議が交わされ、午後4時議事の一切は終了した。

学部から来賓として臨席された加藤、本間両先生を囲んで懇親会にうつり、和やかな雰囲気の中に楽しく歓談し5時散会となる。

昭和41年度歳入歳出決算報告書

自41年3月1日　至42年3月31日

〔A〕 経常費の部

款項	種目	予算額	決算額	比較増
1. 歳入				△ 減
会費	1 一般会費	570,000	528,803	△41,197
	2 終身会費	1,600,000	1,640,059（40年度卒分） 1,104,000（41年度卒分）	1,144,059
入会金	3 入会金	1,700,000	1,718,000（41年度入分） +2,098,000（42年度入分）	2,116,000
繰越	4前年度繰越金	167,319	167,319	0
雑収入	5 預金利子	200,000	247,683	47,683
	6 雑入	333,593	333,593	5
	合計	4,570,912	7,837,462	3,266,550

2. 歳出

事務費	1 給料	612,428	612,428	0
	2 諸手当	323,360	321,723	△ 1,637
	3 役職費	80,000	80,000	0
	4 旅費	210,000	204,960	△ 5,040
	5 交際費	50,000	40,560	△ 9,440
	6 消耗品費	88,000	87,244	△ 756
	7 燃料費	15,000	9,845	△ 5,155
	8 食糧費	7,000	5,880	△ 1,120
	9 印刷製本費	75,000	71,626	△ 3,374
	10 通信運搬費	247,000	246,351	△ 649
	11 借料及損料	7,000	5,420	△ 1,580
	12 修繕維持費	20,000	12,900	△ 7,100
	13 備品費	75,000	72,890	△ 2,110
	計	1,809,788	1,771,827	△37,961
事業費	14 賃金	15,000	7,000	△ 8,000
	15 会報発行費	77,450	77,450	0
	16 名簿作成費	38,000	38,000	0
	17 下宿斡旋費	35,000	25,880	△ 9,120
	18 あかしや奨学金費	72,000	72,000	0
	19卒業祝賀会費	321,392	304,314	△17,078
	20 校友と学生との懇談会費	0	0	0
	21 学生クラブ援助金	200,000	200,000	0
	22 負担補助援助金	230,000	230,000	0
	23 特別事業費	66,442	66,442	0
	計	1,055,284	1,021,086	△34,198
会議費	24 総会費	40,000	37,700	△ 2,300
	25 役員会費	165,500	152,550	△12,950
	26 旅費	49,640	49,640	0

	計	255,140	239,890	△15,250
予備費	27 予備費	50,700	50,700	0
	計	50,700	50,700	0
積立金	28 積立金	1,400,000	1,330,000	△70,000
	計	1,400,000	1,330,000	70,000
合計		4,570,912	4,413,503	△157,409

3. 差引残高

（歳入）（歳出）（残高）

7,837,462－4,413,503＝3,423,959……昭和42年度へ繰越す。

〔B〕 積立金の部

昭和42年3月31日現在

総金額 4,676,744

内訳 終身会費積立金 4,630,000

退職積立金 46,744

〔C〕 次年度引継総金額

〔A〕＋〔B〕＝8,100,703

昭和42年3月31日

上記の通り報告いたします。

日本大学工学部校友会会長 根本年雄 ㊞

上記の通り相違ありません。

監査 関根昭一 ㊞

〃 後藤尚 ㊞

〃 高野操 ㊞

昭和42年度予算

款項	種目	予算額	41年度決算額	比較増減
1. 歳入の部				△減
会費	一般会費	0	528,803	△528,803
	1 終身会費	1,800,000	2,744,059	△944,059
入会金	2 入会金	2,000,000	3,816,000	△1,816,000
繰越	3 前年度繰越	3,423,959	167,319	3,256,640
雑収入	4 預金利子	250,000	247,683	2,317
	5 雑入	30,000	333,598	△303,598
合計		7,503,959	7,837,462	△333,503
2. 歳出の部				
事務費	1 給料	586,500	612,428	△25,928
	2 諸手当	326,000	321,723	4,277
	3 役職費	100,000	80,000	20,000
	4 旅費	130,000	204,960	△74,960
	5 交際費	50,000	40,560	9,440
	6 消耗品費	90,000	87,244	2,756
	7 燃料費	15,000	9,845	5,155
	8 食糧費	5,000	5,880	△880
	9 印刷製本費	75,000	71,626	3,374
	10 通信運搬費	250,000	246,351	3,649
	11 借料及損料	5,000	5,420	△420
	12 修繕維持費	25,000	12,900	12,100
	13 備品費	75,000	72,890	2,110
	計	1,732,500	1,771,827	△39,327
事業費	14 賃金	15,000	7,000	8,000
	15 会報発行費	90,000	77,450	12,550
	16 名簿作成費	40,000	38,000	2,000
	17 下宿対策費	10,000	25,880	△15,880
	18 あかしや奨学費	120,000	72,000	48,000
	19 卒業祝賀会費	170,000	304,314	△134,314
	20 校友と学生との懇談会費	60,000	0	60,000
	21 負担補助援助費	130,000	200,000（学生クラブ援助）230,300（負担援助費）	△300,000
	特別事業費	0	66,442	△66,442
	計	635,000	1,021,086	△386,086
会議費	22 総会費	20,000	37,700	△17,700
	23 役員会費	60,000	152,550	△92,550
	24 旅費	5,000	49,640	△44,640
	計	85,000	239,890	△154,890
予備費	25 予備費	251,459	50,700	200,759
	計	251,459	50,700	200,759
積立金	26 積立金	1,000,000	1,330,000	△330,000
	27 次年度積立金	3,800,000	0	3,800,000
	計	4,800,000	1,330,000	3,470,000
合計		7,503,959	4,413,503	3,090,456

昭和42年度役員

会長 根本年雄（機4）
副会長 武田仁幸（土3）
同 （事務局長）
半沢忠（化6）
理事（事業部長）
鈴木光保（土5）
理事（経理部長）
植木浩（電14）
理事 塚原健二（機3）
同 平手仁（化5）
同 武藤貞泰（土8）
同 小林剛（建15）
監事 諏佐達也（建1）
同 後藤尚（化2）
同 宍戸敏雄（電6）
評議員 小山田克己（土5）
同 続橋忠良（土7）
同 遠藤茂勝（土14）
同 斎藤久志郎（建5）
同 遠藤弘（建7）
同 富田和夫（建11）
同 菅野宗和（機2）
同 近藤功（機4）
同 柳沼福夫（機5）
評議員 関根昭一（電2）
同 釣巻旦男（電3）
同 渡辺清末（電4）
同 篠崎道夫（化2）
同 高野操（化3）
同 田部栄仁（化7）
同 善方威夫（化8）
同学生 星文明（建3）
同 仝 野瀬栄治郎（建3）

今年度の
あかしや奨学生決まる

工学部校友会が毎年学生に支給しているあかしや奨学資金の、昭和42年度奨学生は、多数の応募者があつたが、学生課長の推せんされたものの中から校友会役員が慎重に検討して候補者を選出し、更に理事が面接を行なつて決定した。なお今年度は総会の決議により増員して5名とした。

決定者は次の通りである。

★採用決定者

志田幹雄（建築学科3年）
静岡県立沼津工業高等学校出身

内宮信男（機械工学科3年）
北海道立興部高等学校出身

甲木道宏（工業化学科3年）
福岡県立伝習館高等学校出身

近江雅夫（建築学科2年）
新潟県立三条高等学校出身

河村博祥（機械工学科1年）
広島県立尾道北高等学校出身

★奨学生になつての感想

機械工学科3年　内宮信男

此度校友会のあかしや奨学生に数多くの中から選出されました事は本当に感謝いたしております、と同時に今後の勉強に対しましても、この名に恥じることのないようにと責任の重さを痛感しつつ、これを心の支とし、大きな将来の目標に向かつて一歩一歩、堅実に邁進する覚悟でおります。

大学に入学して早くも三年、大学一年の時は初めての時間的に制約のある寮生活で、生活の面や勉強の面でも無我夢中に過ごしました。二年からは時間的に制約のない下宿生活になりましたが、それと同時に専門科目の難しさと、とかく単調になりがちな一人だけの生活に、何度か挫折しましたが、そのたびに、下宿の皆様の温かい思いやりと、友達の適切なる助言、入学する時母と交した数々の約束を思い出しつつ、なんとかものにしようと微力ながらも努力して来ましたが、此度この様な奨学生に選ばれ、心中嬉しく思つております。これからもわずかながらも努力し、目標達成の為にも不屈の意志と闘志を持ち、恥ずかしくない成績を残すと共に、生活の面でも冗費を省き残された学生生活を意義あるものにしようと思つております。この奨学金を出される校友会の先輩諸氏、並びに諸先生には感謝の念で一杯であります。

工業化学科3年　甲木道宏

あかしや奨学生になつて、自分の日頃感じている事を述べさせてもらいます。

僕は晴れの奨学生になる事が出来た事を心から喜んでいる。又両親も喜んでくれました。これは自分の名誉でもあり心に深く刻み込まれました。しかし、反面僕よりもつともつと苦しい人を僕は忘れない。そのために一層の努力と謙虚な態度で、大学生生活を送りたいと思つています。過去をふり返りますと、一年生の時は色々と心の動揺等があり、自分の心との戦いの連続でした。そのために先輩諸君からしつかりしないと落第するぞとよく言われた。しかし自分は家庭からの送金の額が少ないためそれ程遊んではいなかつた。しかし現在周囲の友達を見ますと、快楽を欲し何を目的に又何を追求するために大学に来たのか、僕自身大学は学問の場であり、又学問追求の場であると考えます。そのような態度になるのは、家庭の裕福な余り金の有難さがわからないのではないのか。もつともつと大学生としての自覚を僕自身もう一度これを契機に考え直してみたい。そして将来自分達が社会を背負う時が来たら僕自身、身を抛つて社会にささげたい。その事が母校の名を社会に響かせ、後輩の育成のためになるのでないのかと思う。

僕は家庭が苦しいからといつて暗い人間になりたくない、人に愛され尊敬される人間になりたいと思つています。僕は最後にあかしや奨学金を有効に使つて今後の自分の勉強のために役立てたいと思つています。そうしてもう一度、校友会の皆様方に心からお礼申し上げます。そして校友会の今後の発展のために、自分のあるだけの力をもつて協力させていただきます。

建築学科3年　志　田　幹　雄

あかしや奨学生に候補者として、選出したという工学部校友会からの通知を受けとつた時は非常に嬉しかつた。

自分の家はサラリーマンの家庭で、今年の春同じ日大工学部卒業をした兄と二年間二人で居た時は、父母をはじめ家族の者には、大分苦労を掛けました。奨学生になれて、自分自身は勿論家族の者も皆喜んでいることと思います。

今年は自分にとつて大切な学年であるので、勉学の方面とか、人間形成に必要な書物を購入することにこの奨学金を当てるつもりでいます。そして今後は、あかしや奨学生に恥じない態度で、一歩々と一層勉学に励む所存でいます。

今年こそは、学生の本領を発揮しようと思つています。

建築学科2年　近　江　雅　夫

今回、あかしや育英会の奨学生に選ばれて、学生としての新たな自覚の様なものが生まれた事を感じました。　今までその自覚がなかつたわけではありませんが、これを機会として、学生のあるべき姿の様なものを考え、その根本である学問の探究をもつともつとして少しでも日本大学の為になる様、又質の向上に役立つ様な努力をする自覚が生まれました。

ところで僕の場合、母親しかおりませんので、経済的には私立大学は及びもつかなかつたのですが、親類一同が資金を出し合つて、現在の僕が有るわけですので、少しでも家の財政を楽にするため、1年生の時から相当にきついスケジュールでアルバイトをして、家からはほとんど送金なしでやつてきたわけですから、今回この奨学生に選ばれて、本代はだいたいこれで間に合うので、だいぶ楽になりました。

今年は、もつともつと勉強して、三年生には特待生になりたいと望んでおります。

最後に、校友会の有難さをしみじみと感じております。

機械工学科1年　河　村　博　祥

この度、今年度のあかしや育英会奨学生に採用されましたことはこの上ない喜びです。

この度の入試は、史上最大の受験難と言われながら多数の浪人からのがれ、現役で日大工学部に入学できたことは家族のものはもちろん高等学校の先生方にもよろこばれ、又母に対して「大変親孝行だつた」。と言われて僕自身も現役で入学できたことは、親孝行をしたと思つていました。しかし親からはなれ一人ぼつちの下宿生活をしはじめると、しきりに母の苦労が身にしみてわかるようになりました。

そこで私は、入学式の時に育英会奨学生の説明を聞き一度申し込んでみようと思いました。父がなくなり母は一人で僕に苦労させないよう努力してきたようです。僕が母の努力に答えたかどうかと思うと、少しでも母を喜ばせたい気持ちになりました。

申し込み書を出し、それから数十日後「面接により決定する。」との手紙をもらつた時は、もう奨学生になつた気持ちでうれしくてたまりませんでした。「まさか奨学生に」とは思いながらも何となくうれしかつたのです。数日後の面接と同時に奨学生としての決定がわかりましたが、その面接のとき「ガンバツテクダサイ」と言われた。私は異様な気持ちになり心が引きしまるように感じられた。がんばらなくてはならない。現在の自分に疑問を感じた。「ガンバツテクダサイ」のこの言葉の意味は非常に広いように思いた。

勉強にも、生活運動、健康、にもガンバルということはあらゆる事につながるのだ。奨学生になつたことは決して自分を満足させるためのものではない。充実した一年間を送る事は大切だが、この喜びのみに終つてはだめなのだ、という事を感じた。これを機会に今後、世のため人のために、そしてお世話になる校友会のために、ほんの少しでもお返しができるなら私にとつて又母にとつてこれほどしあわせなことはないだろうと思つています。この大切なお金を有意義につかわせて頂く事をお約束いたしますが、なお責任と不安を感じている次第であります。

ボーナスの
お預け入れは
「あきぎん」の
ボーナス窓口へ

みなさまの
秋田銀行

郡山市の成長

安積疏水の開発に始つた郡山市成長の歴史は、戦前既に相当な地域的商工業集積として、評価されていたが、去る昭和39年の新産業都市指定と、翌40年の5月8月の二次に亘る広域合併によつて再度新らしいエポックに突入した。それから2ケ年——。

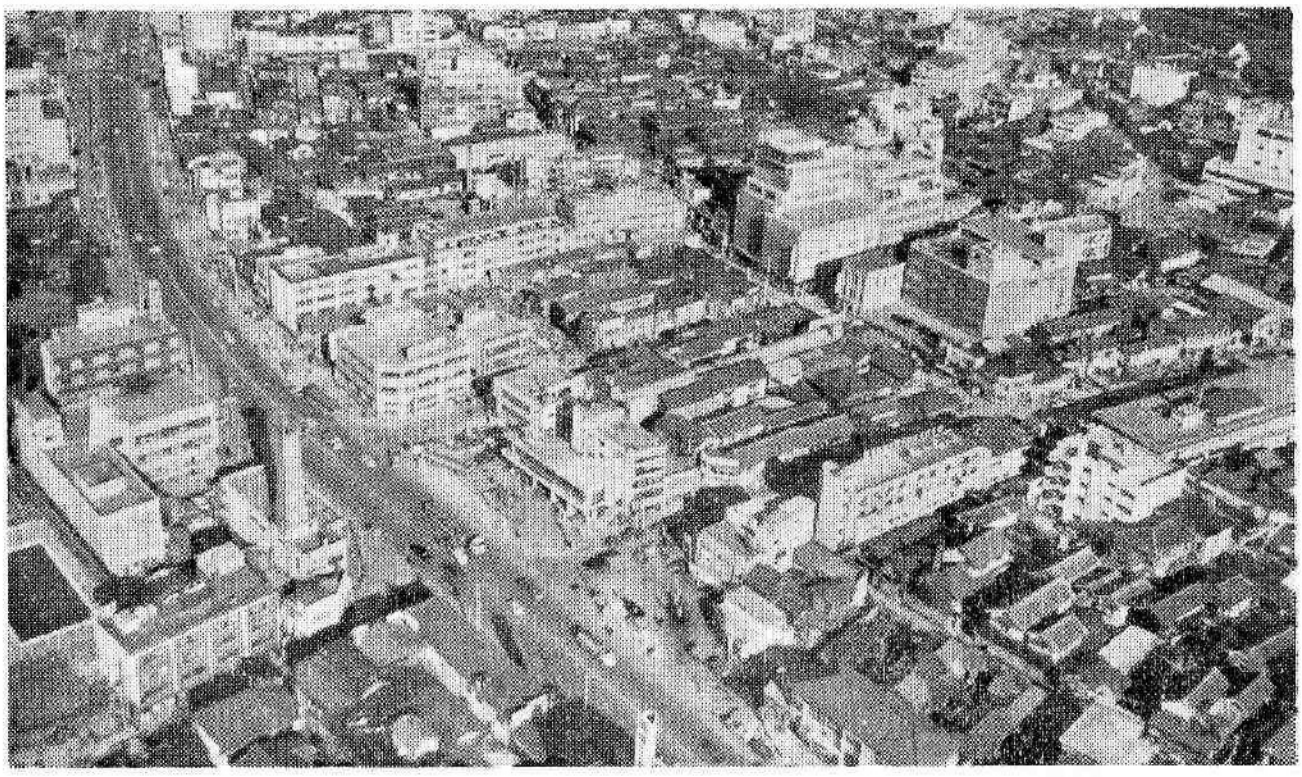
地域の拠点開発方式のための地方中核都市として、如何に目覚しく近代都市への脱皮を急速に進展しているかは、市内を南北に縦貫する国道4号線沿に進出して来た商社、金融機関関係の高層ビルの林立、外環線に密着しながら断えず膨張を続ける住宅街、精力的に建設を進めている工場群を見れば誰でも頷けるものがあろう。勿論、郡山市においても都市問題がない訳ではない。否、むしろその発展速度が急であるだけに東北でも特に市街問題が提起されている都市であろう。年間に新築される建築物は約 1.500戸。人口の伸びは 3.500人。地域開発のバロメーターとも云うべき工業出荷額の伸びは、年間70億円と人口5万程度の都市の年間出荷額の伸びさえ示している。

したがつて、都市問題についても、都心部のドーナツ化現象、近郊地帯のスプロール化、幹線道路と都心間に見られるストリップなど大都市同様の対策が待たれる問題も惹起している。ともあれ、全国15ケ所の新産業都市のなかでも優等生と云われる程に、都市集積は順調であり、所得、文化面における格差の縮少は急ピッチである。現在当地域の焦点となつているのは何と云つても東北自動車道であり、この大動脈の完成は郡山市と首都との時間距離を一挙に⅓に縮少してしまうことになり、実に一層の都市的充実度の高まりが進行することであろう。

産業基盤の充実に伴なう就業人口の留保は波及的に三次関係の振興も促進し、市内には既に4ケ所の百貨店があり、これは人口10万人につき1ケ所が標準といわれる基準からすれば、40万人の経済圏人口を郡山市が保有していることの裏付とも云えよう。又、市内の専門的商店は都市の防災街区の造成と併わせて協業化のための中高層化が進み、都市景観は日々その面目を一新して来つゝある。

農業はそれ自体の近代化への契期の遅れから、現時点では他次産業との格差が見られるが、市政のモットーともなつている「緑と太陽の街づくり」のためにも生産緑地としての近郊農業、企業としての農業へ意欲的である。昭和50年における人口規模を約45万人と考えている郡山市は現在順調にその近代化のレールの上を走つていると云つて差支えあるまい。

（郡山市企画課提供）



（写真は郡山市中心街）